展示古書籍紹介　32

期　昭和五十九年十二月三日～二十四日
於　図書館三階閲覧室（本館）

俳諧名品　複製版

俳諧は、室町末期、山崎宗鑑・荒木田守武等の頃から行なわれた卑俗・滑稽を中心とした連歌（俳諧連歌）から起った。近世に入って、松永貞徳が俳諧を独立したジャンルとして確立し、以後貞徳が率いた貞門派、俳語を自由に用いた西山宗因を中心とする談林派と変遷した。そして元禄期の松尾芭蕉によって幽玄閑寂を旨とする完成された詩を作り出すに至るのである。

俳諧は、狭義には俳句・連句の呼称であるが、広義として俳文・俳論をも含めた総称をいう。

今回は、俳句そのものではなく、芭蕉、蕪村による俳文・紀行文・俳画等を、お楽しみいただきたい。

(1)

おくのほそ道　素龍本
松尾芭蕉著　枡形本　八行書き　東京
写本二冊　日本古典文学会　昭和四十七年刊
（複刻日本古典文学館第一期）　別冊解題　麻生磯次著
原本　元禄七年　素龍清書本　西村弘明氏所蔵　付　三四坊「細道伝来記」
元禄二年のおくのほそ道の紀行文であるが、芭蕉真筆の未定稿を素龍が清書した決定稿で、跋文に「元禄七年初夏」とある。芭蕉の死後、遺言により去来に譲られた。

（特殊資料室）

(2)

おくのほそ道　去来本
松尾芭蕉著　枡形本　八行書き　東京
写本一冊　岩波書店　昭和八年刊
別冊解説、勝峰晋風著　原本　元禄八年　去来筆本　伊賀上野　村治家所蔵
この「奥の細道」は、去来が素龍本を、その素龍の跋文をも含めて書写したもので、行数、表紙等も忠実に素龍本に従っているが、仮名遣い、誤字などの点で異同がある。

（特殊資料室）

(3)

幻住庵記　真跡本
松尾芭蕉著
写本一軸　十七・二糎　「昭和三十六年刊」
原本　元禄三年　松尾芭蕉真筆奥書
元禄三年四月から八月中旬まで、芭蕉は石山の奥の国分山の幻住庵に住み、その生活を綴った。それが、この俳文である。美しい景色の自然と簡素閑寂な日常とが合いまって、しみじみとした情調を漂わせている名文である。

（特殊資料室）

(4)

奥の細道画譜
与謝蕪村　書・画
書・画各十四枚　「昭和四十三年刊」
画人としての蕪村は、壮年期には、上総、下総をはじめ奥羽地方にまで旅をし、多くの芸術作品を残した。これは、落款も署名もないので、製作年代も自ら書いている。画材は人物が主となっている。

「奥の細道」の本文

（特殊資料室）

(5)

蕪村書簡集
自筆本一軸　三十三糎　東京　勉誠社
岡田利兵衛、波多野幸彦著
原本　安永・天明期書簡及び句切二十一点貼り込み　武藤山治氏旧蔵　新井伸吉氏所蔵

昭和五十年刊　別冊解説・釈文

（特殊資料室）

与謝蕪村は、江戸中期、安永・天明期俳壇の頂点に立ち、俳諧中興期を築いた。その晩年の書簡及び句切（俳諧の断簡）二十一点を収めたもので、年次はまちまちだが、安永三年頃から天明三年十月までのものを主とする。

弟子東菑（とうし）に宛てたものが、ほとんどである。ちなみに蕪村は、天明三年十二月、京都で没している。

'94. 12. 4